

## 児童健全育成賞（数納賞）佳作

# 自分を愛し地域に誇りをもつ「高校生等」を育む事業展開 ～高校生等 ふれあい体験ひろば事業～

兵庫県姫路市 兵庫県立こどもの館

## 1. はじめに

兵庫県は、今から22年前に発災した「阪神・淡路大震災」で“支え合う”ことの大切さを痛感した。中でも、世界中から駆け付けた180万人ものボランティアの活躍は、地域社会に勇気と希望をもたらし、「自分たちのまちづくりは自分の手で復興したい!」という意識が高まった。その後も、災害のみならず、まちづくりの現場で、多くの県民が中心に活動し成果を挙げているが、近年では、“家族のつながりや地域の結びつき”といった人間関係の希薄化が懸念され、地域の先頭に立つリーダーの高齢化や人材不足も深刻化している。

その分、地域の担い手として若者への期待が高まり、社会参加を促す取組も盛んに行われ出した。

ところが、子ども・若者を取り巻く状況は厳しさを増しており、単に社会活動への参加を促すだけではない。まずは、自分自身と地域に誇りと自信をもつ機会が重要ではないかと考えた。

そこで、幼児と保護者の来館が中心で、勉学や部活で忙しい中高生の来館者が少なく、さらにボランティアの固定化・高齢化が進む私たちとしても、『人と人の絆や地域社会の再生の原動力』として期待できる若者を「子どもの頃からどのように積極的に関わり育てていくのか」というプログラムの考察・実行に着手した。

## 2. 事業化の背景と方向性

少子高齢社会が進行するなか、子ども・若者数も減少し、地域で同世代が切磋琢磨しながら群れて遊ぶ機会が減少している。また、子育て世帯の核家族化も進み、特に1人親家庭の比率が増加するなか子どもの貧困率も上昇を続け、将来に夢が描きにくい状況が懸念される。そのことから、子どもの育成を家族だけでなく、社会全体で担う具体的な取組の構築が急務となっている。

その厳しい状況下でも、日本の若者は社会に役立ちたいと考える比率が先進国中で最も高く、機会さえ充実できれば地域のリーダーに育つ可能性が高い。保護者も家族とのふれあいや子どもの頃から多様な体験が大切と考えている。

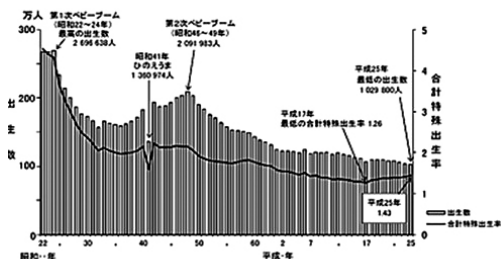
◆人口減少社会…合計特殊出生率は1.5人を下回り若年人口が減少を続け（厚生労働省人口動態調査）、集落の自治など共同体としての機能が衰えている地域が急速に増加。向う10年存続が難しいと予測される集落は2,000を超える（国土交通省調べ）。

◆核家族化…世帯平均人数2.49人（H26国民生活基礎調査）となり、単独世帯と子どものいる1人親家庭の割合が増加（H27兵庫県勢要覧）し、地域・家庭内で子供が群れて過ごす機会が減少。

◆子どもの貧困…子どもがいる現役世代のうち

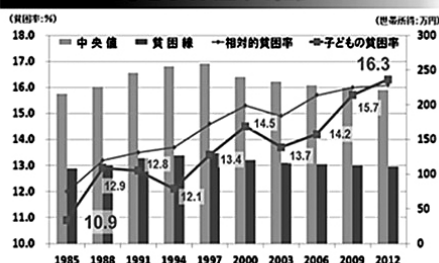
大人が1人の世帯の貧困率は58.7%と主な先進国の中で日本が最も高く、いまや子どもの6人に1人が貧困状態にあり、経済的な事情等から進路に希望を見出しにくい若者の増加が懸念される。

### 少子高齢化社会を生きる子どもたち



【H25 厚生労働省「人口動態統計」より】

### 日本における子どもの貧困率の推移



【厚生労働省 国民生活基礎調査 2014】

◆不登校・いじめ…全国の小中学生の不登校児童は122,897人（H27 文部科学省調べ）となり、その原因は家庭環境や人間関係に起因するもの等が考えられる（文部科学省）。また、いじめも携帯やスマホ保有の低年齢化とともにネット上での誹謗中傷など、潜在化し見えにくくなっていると懸念される。

◆児童虐待…統計を取り始めて以来毎年増加し（厚生労働省）、虐待者の90%を実父母が占めている（H26 兵庫県調べ）。

#### 【アンケートからみえる状況】

◆若者が地域活動に参加しにくい（しない）主な理由

「仕事や学校等が忙しく時間がない41.3%」、「いつ、どんな活動をしているかわからない36.0%」（H26 兵庫県民意識調査）

◆国際比較による日本の若者（13～29歳）の意識調査

「自国民であることに誇りを持っている…第4位」、「自国の役に立ちたい54.5%…第1位」（H26 内閣府の子ども・若者白書）

#### 今を生きる若者の意識（13歳～29歳）

自国民であることに誇りを持っている	自国のために役立つと思うようなことをしたい
日本: 70.4% (4位)	日本: 54.5% (1位)
アメリカ: 78.2% (1位)	アメリカ: 42.4%
オーストラリア: 75.0% (2位)	オーストラリア: 53.7% (2位)
イギリス: 72.7% (3位)	イギリス: 40.8%
フランス: 68.0%	フランス: 44.8%
ドイツ: 68.2%	ドイツ: 49.7% (3位)
韓国: 58.9%	韓国: 43.2%



【内閣府「子ども・若者白書」より】

◆地域活動団体・グループ等が抱える主な課題・問題点

「活動者の不足39.7%」、「世代交代の遅れ38.4%」

（H26 兵庫県民ボランティア活動実態調査）

#### 【兵庫県の取組方針】

第10期兵庫県民生活審議会答申を受け、地域（＝「ふるさと」…生まれ育った所、心の拠りどころ、住む・働く所、文化や伝統の継承地など）が活性化するためには

- ◆関わりやすい仕組みづくり
- ◆活動を高める仕組みづくり
- ◆高校生等若者が次代の担い手として成長する仕組みづくり

の3点が大切であると考え、特に、①若者がチャレンジする機会づくり、②地域の中での若者の居場所づくりなどを進めている。

## 3. こどもの館の特徴・特色を生かし新規事業の展開を考える！

### (1) 事業のねらい

高校生・特別支援学校などの若者が、世代や地域を超えて交流しながら、主体的に多様な社会体験を重ねることで、自尊感情を深め、自分と地域に誇りをもち、将来に夢（目標）を描きやすくすることで、将来の人材を育む。

### (2) 事業の骨格

- ・高校生・特別支援学校などの世代が中心となり事業展開する。
- ・NPO、企業、学校、地域団体など多様な主体と協働する。
- ・高校生など若者の主体性・自主性を大切にす

る。

- ・働手として尊重し有償ボランティア 1 日図書券千円とする。
- ・地域（大人）全体で若者の支援者となる。
- ・「こどもの館」の特徴・課題を生かす。

#### 【設立・目的】

青少年（0～18歳）の健全育成。

豊かな自然の中で、紙や木の工作をはじめ、観る・聞く・遊ぶ・演じるなど多彩な体験を通じて子ども・家庭（子育て）を支援。

#### 【主な課題】

- ①来館者：年間来館者数約40万人のうち大半が乳幼児と保護者で中高生の来館が極端に少ない。
- ②ボランティア：固定化、高齢化が進み新たな確保に苦慮。
- ③交通手段：最寄駅からバスで約25分。大半が車で来館。
- ④交流：親子や家族間での交流はあるが来館者間では少ない。

## 4. 平成26年度「高校生等ふれあい体験ひろば」試行錯誤

### ～生みの苦しみ～

平成26年6月 企画検討・NPOとの協議開始  
同 7月 近隣高校・特別支援学校への説明開始

平成27年1月 試行実施（参加：2校14名）  
道化師だけの「コメディ・クラウン・サーカス」の開催に併せ複数のNPO・企業と共催。

- ・障害者事業所で作られたお菓子や雑貨の販売補助
- ・「さおり織り」の体験教室の補助
- ・幼児向けのフリースペースでの保育活動等もてなし等（課題）
- ・近隣を中心に、高校・特別支援学校へ事業説明に回るものの、当方の説明も不十分で理解が得られにくい。
- ・予算面で県などの支援を受けていなかったため自主財源（自動販売機の売上等）からの支

出に苦慮（H28年度より県費）。

- ・多様な主体間での調整や役割分担があいまい。（本格実施へ）

初回となった試行実施が来館者、参加者ともに好評であり、その内容が口コミで伝わり高校等の参加申し込みが増え、本格実施が出来る見込みがたった。主な要因は、①高校生と特別支援学校生の交流が進んだ。②NPO法人、企業、行政などが協働し各方面で話題になった。③神戸新聞の協力で移動号外車に新聞発行で広く周知できた。…ことなどが考えられる。

## 5. 平成27年度から高校生等がつくる「ひろば」

### ～ついに本格実施～

平成27年度 館内21回、館外5回実施

平成28年度 館内25回、館外7回実施

（10月末現在）

平成27年11月中旬からの改修工事で休館となるまでの7か月間に、高校生等の自主性を尊重しながら、事業を軌道に乗せることに成功した。

### （1）館内事業における一日の流れ

高校生等ボランティアは、全体ミーティングを行い一日の活動が始まる。一日の流れや諸注意を聞いた後に、自己紹介やアイスブレイクを行うなどして、高校生等ボランティアの緊張を解きほぐすとともに、交流を深め一体感を高めていく。その後、各自の目標設定や班での話し合いをして、保育コーナー等の準備に取りかかり、11時からのオープンとなる。活動後の全体ミーティングでは、振り返りとして、感想を発表し合い思いを共有している。将来のことや自尊感情にふれた感想、次回を見通した前向きな意見なども出ており、お互いを励まし合う場ともなっている。

#### 【参加の高校生等の声】

- 高2女子「自分が少しでも役に立っていることが嬉しかった。幼児からの『ありがとう』の一言が、嬉しく恥ずかしかった。」
- 高1女子「今日が初めてで、先輩のように上

手くできなかったけど、次回は自分から声をかけていきたい。」

- 大1女子「このボランティアの先輩として、幼児の対応に戸惑っている友だちにアドバイスをしていきたい。」

## (2) 活動内容

### ①親子ふれあい体験を通した子育て支援の展開



高校生等ボランティアが、当館内「おべんとうひろば」でのふれあいスペース（乳幼児向け遊びコーナー）で、活動日に初めて出会う他校生との仲間づくりを目的とする「朝のミーティング」を行ったうえで、本の読み聞かせや折り紙、ペープサート、的あて等の保育活動を実施している。また当館の館内放送やチラシ等を作成・広報活動にも参加している。更に自主企画イベントとして、「おまつりひろば」を開催し、七夕やクリスマスなどの季節にちなんだ工作や魚釣り、ボウリング等の遊びコーナーを設け、幼児のファンを増やしている。

#### 【参加の高校生の声】

- 高3女子「ある女の子が折り紙やお絵かきをして別れる前に手紙を書いてくれた。そこには、『お姉ちゃんは話しやすくて楽しかった。これからも、たくさんのこどもを笑顔にしてね。』とあり、嬉しくて、その言葉は自信につながり、ずっと自分を励ましてくる。」
- 高3男子「子どもたちとふれあい、保育士になりたいと思う気持ちが強くなった。」

#### 【参加高校の教師の声】

- 「近隣の幼稚園で実習などを行っているが、少人数の活動は経験がなく、一人ひとりが責任重大で、コミュニケーション能力はもちろん、自主性や創造性、臨機応変に対応する力

が要求される。しかし、ボランティアに参加した生徒全員が一日の中でもとても成長できたとし、回を重ねて参加した生徒は、本当に頼もしいくらいの働きをするようになった。」

### ②障害のある、なしを超えて育む「思いやりの心」の育成と社会参加の促進

特別支援学校生が学校の授業で作った農作物や木工作品、障害のある方の手による授産商品（クッキー、雑貨等）を福祉サービス事業所の協力のもと、高校生や特別支援学校生が販売補助をすることにより、障害のある方や来館者との交流を深めている。また、特別支援教育に対する理解を深めるとともに、障害のある子どもと、障害のない子どもや来館者との相互理解と障害者の社会参加も促進されている。

#### 【高校生等の感想】

- 高1男子「ジュースや障害者の施設の方々が作られたものを販売した。特別支援学校の子と一緒に活動することで仲良くなれた。」
- 特別支援学校3年男子「絵本の読み聞かせは、少し心配だったけど、ゆっくりとはっきりと読み上げた。子どもたちは、喜んでいたので、すごく嬉しかった。」
- 子育て中の母親「子どもたちを目の届く範囲で高校生の皆さんが遊んでくれるので、安心して寛げる。」
- 子育て中の母親「授産商品等の販売は、障害のある方の活躍や交流の場を広げることができるので、とても素晴らしい。」

### ③高校生が企画立案するふれあい活動



県立香寺高校吹奏楽部とギター・マンドリン

#### 部演奏会（当館内円形劇場）

内容：寸劇を取り入れ、子どもたちの馴染みの曲の演奏で子どもたちだけでなく、多くの来館を音楽の力で魅了し好評を得た。

##### 【参加者の声】

○小学生「好きな曲だったので、思わずロゾさんだ。とっても楽しかった。」

○保護者「子どもたちを楽しめる演出が大変良かった。今時の高校生は素晴らしい。」

その他にも姫路工業高校演劇部、太子高校Jコーラス部などが、同様の上演をして好評を得た。

#### ④社会体験を通じた「自立」支援

養護施設の子どものを招いて、日本レスキュー犬協会の協力のもと、2頭のセラピードックによるふれあい体験会を行った。高校生ボランティア等は、セラピストの補助として、施設の子どもたちが犬をなでたり、抱きかかえたりして犬とのふれあいを楽しむ手伝いをした。そして、環境の違う子どもたちに接することで、自分の生き方を考えるきっかけとなった。

##### 【参加者の声】

○高3女子「養護施設の子どもたちに対して、接し方が分からなかったけど、心を開いてくれて嬉しかった。誰でも自分の素直な気持ちと明るさで接したら笑顔になってくれることが分かったし、こんな活動をすることで、つらい思いをしている子が救われてほしいと、心の底から本気で思った。」

○施設職員「子どもたちが心を開き無邪気な表情を見せていた。セラピー犬もそうだが、高校生ボランティアの優しさが嬉しかったようだ。」

#### ⑤地域資源で、地域に「誇り」を持つ体験の推進（館外事業）

##### 平成27年度の取組

西脇市において、高校生が自分自身や地域に誇りをもつことを目的とした「ふれあい体験ひろば in 西脇」を開催した。全国的に活躍され

ているファッションデザイナーの海外竜也氏をはじめ、県内の服飾関係の達人たちが、子どもたちの取組を応援するために、ボランティアとして立ち上がり実現した事業である。高校生が地域の伝統的産業である播州織を活用した被服や小物等のデザインを提案し、達人たちが助言を加えたり、高校生とディスカッションを繰り返したりし、プロの厳しさや夢に向かってものづくりに挑むことの大切さについて伝えた。



その後、11月下旬に西脇市の児童館のオープニングイベントの一環として、西脇高校生活情報科のプロデュースによる地元幼稚園児が出演する播州織子ども服ファッションショーを中心とする、第2回「ふれあい体験ひろば in 西脇」を開催した。前回に達人からいただいたアドバイスをもとに、高校生が播州織を使って制作した子ども服を重春幼稚園児19名が着用し、モデルとして登場した。披露する際の様々なポーズなどは、高校生が幼稚園児に教えた。得意げに歩く子や恥ずかしそうにポーズをとる子など、とても可愛らしく、また園児のそばで優しく声をかけ、心配そうに見つめる高校生の微笑ましい姿が印象的であった。

高校生が地元に誇りを持ち、その良さを伝えていく。そして、そこに自分自身の役割を感じ、地域の中で自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識することができるようになればと願っている。

##### 平成28年度の取組

今年度は、「GO！チャレンジ みんなに“笑顔”ひろめたい～子どもたちが自分と地域に誇りを感じるために！～」をテーマとして、

館外事業に取り組んでいる。

#### (ア) こだわりのパン職人を招いた県立香寺高校の実践



県立香寺高校と連携し、「あこうぱん（赤穂市）」代表取締役の鈴木氏を講師に迎えて、姫路市香寺町の野菜・果物・水等を使用した“パン”の商品開発を行っている。おいしいパンを届けることで、“おいしい笑顔”を届けることにつながり、特に家族で食事をする機会の少ない子どもたちに、食卓を囲むことで、会話が弾む、そんなパンにしていきたいと考えている。さらに、パンの商品開発を通して、地元の高校生が地域の元気づくりに貢献できるよう目指している。

##### 【参加の高校生の声】

○高2女子「とても楽しくたくさん学べる研修会だったと思います。本当に、知識や技術だけでなく、食べていただく人を大切に考えておられていました。常に、お客さん目線で考えなければならないことを学びました。班のみんなで協力して素敵なパンを作りたいです。」

#### (イ) 赤穂の新しい味を追求する県立赤穂高校の実践

県立赤穂高校と連携し、元大阪ホテルプラザ製菓料理長の阿部氏を講師に迎えて、赤穂市の特産品である塩とはっさくマーマレードを使用した焼き菓子の商品開発を行っている。プロのパティシエから教わったアイデアやコツを参考にレシピを完成させ、12月14日の赤穂義士祭当日限定で販売する計画である。

##### 【参加の高校生の声】

○高3女子「プロの技を間近に見ることができ、一つ一つの動作に全て意味があって、とても

勉強になりました。先生の『食材に感謝する。何よりも、作り手が調理を楽しんで』という言葉が、とても印象に残りました。」

## 6. 嬉しい誤算

### (1) 大人から見た高校生等ボランティアの評価

来館した保護者や高校生の引率や自校の生徒の様子が心配で見に来られる先生方から、感想や意見を聞く機会があった。

○保護者「高校生のお兄ちゃん、おねえちゃんが、さわやかなので、こどもの館が明るくなった。また、高校生や大学生が子どもを見てくれるので、安心できる。」

○先生「学校では見せたことのない、優しさにあふれた表情が見られた。幼児とのふれあいで、多くの気づきがあったようだ。」

○校長「この体験を財産にして、これからの進路を考える良い機会になってほしい。子育てに関心を持ち、将来親になる期待が芽生えている。」

「ふれあい体験ひろば」は託児所ではないが、子どもが遊んでいる時に、保護者がくつろぎ、保護者同士や高校生等ボランティアとの交流が評価されていると考えられる。

### (2) 先輩ボランティアの力

昨年の11月中旬からの当館の改修工事で休館となったにもかかわらず、今年度この事業がスムーズに展開したのは、昨年度に関わった高校生が大学や短期大学に進学し、引き続き「ふれあい体験ひろば」のボランティアとして登録してくれたお陰である。彼らは、先輩ボランティアとして、初めて参加するボランティアに対して指導的立場として面倒を見てくれている。また、年度初めに近隣高校に出向き、事業説明をしてボランティアの協力依頼をした時に、協力的な学校、学校長、担当の先生に出会えたことも大きな要因であったと考えられる。

## 7. 高校生等ボランティアの成長

「ふれあい体験ひろば」で活動している高校生等ボランティアにとって、館内事業では、幼

児やその保護者、障害のある方など世代や地域をこえて交流する多様な体験が、社会参加や社会貢献の場となっている。そして、館外事業では、地域資源で地域に「誇り」を持つ体験の推進に寄与していると言える。

#### 【参加の高校生等の声】

- 館内大1女子「幼児に対する接し方がわかり、働くことの充実感が味わえた。そして、子育てへの親しみや親になることへの期待が膨らんだ。」
- 館外高3女子「自己肯定感や地域への愛着、誇りが増した。また、社会の一員としての自覚や将来の進路や生き方を考えた。」

年度等	H25 (未実施)	H26 (試行)	H27 (本格実施)	H28 (10月末現在) (継続)
参加校数(校)		3	6	21
開催回数(回)	館内	2	21	23
	館外	0	5	7
	総計	2	26	32
参加者延べ人数(人)	館内	21	330	438
	館外	0	68	122
	総計	21	398	560

	H25 (通年)	H26 (通年)	H27 (4月～9月末) ※1	H28 (4月～9月末)
年間利用者数(人)	館内	354,458	379,221	203,059
	館外	37,274	29,190	6,453
	総計	391,732	408,411	209,512
対前年同期比(%)		104.3	88.3	106.4

※1 H26とH27を比較すると、H27は11月より休館したため、H26に比べ利用者数が減少した。

上を図る必要がある。そして、「ふれあい体験ひろば」で活動している高校生等ボランティアに向けられた子育て中の親のニーズを把握し、必要な情報提供をして、安心して子育てができるような支援を考えなければならない。

「ふれあい体験ひろば」が高校生等ボランティアにとって、自尊感情を育み、自分と地域に誇りを持つ場になり、将来親になることへの期待を高め、地域リーダーとなってくれることを願っている。そして、高校生等ボランティアによる子育て支援体験活動がこれまでの児童館の在り方を変え、新たな児童館の在り方を追求していくものだと信じている。

これまで当県が進めてきた県民運動や参画と協働の取組を活かし、若者が地域の担い手として成長する取組を推進していかなければならない。高校生等の若者に役割を与えるとともに、責任を持たせ、達成感を感じさせることで、そこが居場所となり、居場所での地域の人々や多世代との交流の中で、地域のルールを学び地域とのつながりを実感し、担い手としても成長していく。地域で活躍する新たな担い手が増え、誰もが夢や希望が持てることのできる豊かな地域社会づくりにつながると考えている。

## 8. おわりに

3年目の「ふれあい体験ひろば」事業は、来館者から幼児とのふれあい活動に対する期待が向上するなどの成果を上げている。さらなる事業展開を図るため、次の3点を今後の課題として取り組んでいきたいと考えている。

- ① 高校生のアイデアやデザインを活かしたイベント企画や商品開発・販売の促進を進めるための「多様な主体との連携」
- ② 高校生等ボランティアが住んでいる地域の再発見による館外事業の拡充を図るための「更なる地域の魅力発見」
- ③ 子育ての不安や子どもの育ちに関する悩みを抱え、孤立しがちな家庭を支援する「子育て中の親の応援」

これらの課題に対しては、当館がアンテナを高く持ち、主体的に高校や関係機関に働きかけ、連携を深め、また当館のコーディネートの向